

【執筆者の紹介】

現住所 岩手県大船渡市大船渡町明神前

生年月日 大正十一年十月

学歴 昭和十二年三月 日頃市高等小学

校卒業

職歴 同 十二年四月 建築大工徒弟修

業

同 十五年 釜石製鉄社宅建

築

軍歴 同 十八年二月 関東軍一〇七師

同 十九年十月 陸軍兵器学校

同 二十年四月 九十連隊本部

陸軍伍長

同 二十年八月 満州西部国境に

て日ソ戦闘に参戦

同 二十年八月二十九日 武装解

除

同 二十年八月二十九日 武装解

除

シベリア抑留 同 二十年十一月三日 シベリア

同 シップヘーゲン収容所に収容、強

制労働に従事

同 二十三年六月 ナホトカ収容

所 労働

同 二十三年七月 ナホトカ出港

帰国

帰国後の職歴 同 二十三年七月 建設業自営、

大船渡職業訓練協会長、大船渡地

区技能士会長

(岩手県 田辺 壮久)

この足この目の記録

岩手県 鈴木 重五郎

幼少三歳原因不明の病。目から入菌、放置すれば失明して死亡、治っても馬鹿になると医者から扱一宣告を受け、祖母は馬鹿でもよいから生かし

ておきたいと、昭和三（一九二八）年十一月、仙台大学病院、右眼手術。家族は頭痛の種、祖母の一言で私の活あり。安政四（一八五七）年生まれの祖父が入籍。明治十六（一八八三）年ころから祖父、晝業。父は明治十八年生まれ。父の弟妹七人、皆心配、皆の願が通じ、今日あるを感謝します。

昭和十二年姉は岩手師範学校在学中、進学を断念。父の晝業でいかほどの収入。

昭和十五年卒業、先生は岩手殖産銀行推薦。太田遠野支店長さんと校長室面接、採用決定。その後に県立遠野中学校からの求人、勉強捨てきれず、三月二十五日卒業、三月二十六日よりラッパ手心得として勤める。

昭和十六年元朝詣り太陽の気象現象で真っ赤に見える。不吉の予感。同年五月二十三日、米内光政海軍大将、昔から戦勝祈願に遠野郷合祀南部勤王五世南部神社に参詣、途路県立遠野中学校休憩に立ち寄る。文武両道の教育、校長辻悦淳慶大福

島県寺住職、配属将校陸軍中尉平賀清一郎花巻出身。石川文三、佐々木允彦、佐々木孝、給仕 鈴木重五郎の四人で接待する。大きな岩のようなガッチリした体格、顔は温顔、笑み浮かべ、日本の指導者、ただただ感激でいっぱいだった。何故に私までそこに居合わせたのか、真意分からず。辻校長の軍事一色より文の配慮からの黙案でなかったろうか。

同年十二月八日、日米開戦、戦勝祈願の暗示の来校と推察する。昼は仕事、夜は青年学校軍事教練、日一日と急雲身にしてみる。

昭和十七年十月、岩手興産無盡株式会社遠野支店勤務、いよいよ戦雲急を告ぐ。昭和十九年四月繰り上げ徴兵検査。第三乙種合格。検査官盛岡司令官村上大佐に宣誓する。金銭勘定どころでない。女子だけ残し県内の銀行無盡会社すべての職域から昭和十九年十月神奈川県高座郡寒川町日本内燃機株式会社百二十人職域徴用として行く。無盡会社行員一関支店にて労わりの言葉受け、ソロ

パンを工具にかえ兵器増産の明け暮れ。

父に征きますと、昭和二十年二月十日、弘前東部八十部隊入隊。

二月十六日、弘前駅長、普通は「発車」と言うが「出発」と声高々と宣言する一言で身は緊張する。昼夜無停車。玄界灘は陸で育った者にはきつかった。船酔いを経て、二月二十三日、興安総省第一〇七師団二〇一部隊一大隊本部猪俣隊に現地入隊、五又溝三角兵舎の一線生活が始まる。

初年兵五十二人勢ぞろい、関東軍の一任一步責任を負いつつ赴任す。班長斉藤市太郎伍長、教育係木村善作兵長、遠藤松男兵長である。寝食は隣木村兵長、鎌田庄吉、米崎村小中井出身、幼き体に訓練の毎日で肺炎の病魔に勝てず五月十九日永久の旅路に冥福を祈る。同月補充兵在満入隊す、三カ月経ずして年若でも古年兵。我々の乗ってきた汽車は折り返し九州防衛と古年兵の人たちが入れ替えて行く。定かならず。一期検閲六月いつしか仏の優しさの目も皆三角に見える勇まし頼もし

恐さの目。

昭和十九年六月二十九日陸軍大佐米本勝男、宮中において天皇陛下より軍旗奉戴一周年記念日で祭典準備に大わらわである。急を要する陣地構築で十五日繰り上げ実施される祭典は想像以上の厳粛に行われ、神々しさいっぱいだった。ただただ有りがたい。一人前の生死を誓った。祭典終了後の内務班余興に同郷の門前盛治、春まだ浅き戦線に古城に香る梅の花せめて一輪母上に便りに秘めて送ろうじゃないかと歌った戦友、梅の花はおろか己自身も未開のつぼみでハタブラーグの凍土に散る。生家は遠野物語の発祥地土洺常堅寺カッパ洺のそばにあり。

七月五日ころより陣地構築に着手。一〇七師団の部隊各地から続々と集結する。七月、師団司令部五又溝に木村伍長引率で使役に行く。七月七日師団司令部創立記念式に参列す。五又溝周辺は約一カ月以上も二〇一部隊前を続々と北上し移駐して来る部隊の通過を見るにつけ、一戦を交えるの

は遠からずではなかるうかと覚悟した。

一期検閲後、傘形散兵の軍事作戦初年兵ただ一人参加する。南方作戦での初作戦？ 八月一日編成替、配属輜重一大隊猪俣隊本部行李第三分隊長木村善作伍長指揮下、十二人入る。鈴木は一週間後北支の通信教育隊に三カ月くらい教育に行くかもしれないと内示を木村光雄伍長の犬舎に行つて犬にかまれしときに言われる。班違いなのに変わったと思ひながらも、どこからの指示なるものか不明。

一週間後、誰も予想しない九日未明飛行機が飛来する。モスクワ爆撃の途中とのうわさだった。見上げると急降下、厩舎直撃二、三発。七十頭の馬が驚き生きた心地がなかった。二人での当番、木村善作伍長に引率され、弾薬糧秣八車両に積む。九日午後十時を期し師団撤収との報あり。ソ連機四機が飛んで来て弾薬庫前が混雑している。一機は三個爆弾投下、物凄い爆発音とともに黒煙は大火を見るようであった。連隊本部や三大隊の

行李班は早朝弾薬を受領しているところを爆撃され混乱する。一大隊は一番遠いので糧秣を先に受領す。山本茂八上等兵より物品倉庫で靴下二十足受領す。戦になれば幾らあっても足りないんだの親心。

五又溝から夜間出發。昼間行動は飛行機からの機銃掃射の危険がある。出發して間もなく夜間故に他の部隊が割り込み、一車両が事故で遅れたとのしらせで探しに戻ったとき、幸いに歩兵部隊に手伝ってもらい、転んだ車両を起こす。それからはこの部隊か尋ねる事によって自分たちの隊の位置が分かるのだと指示される。

照明弾が赤と青が上がる。前方に敵ありで輜重隊後退、歩兵前進で、いよいよ敵と遭遇、戦闘開始。一大隊行李班だけなぜ、最前線に出て曳光弾の飛び交う所に位置したのか、当時連隊本部の行李長は見習士官、大隊長からの要請で弾薬班は運ぶのに糧秣も全部部隊の先頭に出たのか、どうしても考えられない。無理してあるとき山登りした

り駅方面に出ると全滅したかもしれない。なぜなら戦闘中隊でも激戦中山を下って西口駅方面に出た者や他の大隊に出た者はほとんど戦死しているとの情報があった。あの晩曳光弾に追われるように師団本部の方に戻ったから一兵の損害もなかった。敵味方の存在を確認しない所には絶対車両部隊は進行してはならない。歩兵部隊は自分一人だけであるが、行李は馬も車もある。川一つ渡るにしても、流れ、深さ、速さ、荷物もよく考え状況判断、誤れば部隊の命とりになる。

曳光弾に散々やられたとき、友軍の方向と思われる右手の山から、左手の方からも一斉に射撃されたときは既に大隊は左前方に回って難を逃れ、我々の進んだ窪地はソ軍の背後であったようで、それが照明弾で背後に進行したために一斉に射撃されて、すべてに包囲挟撃される。行李長、一刻も早くここを立ち去れと言ったのも、どうも友軍はいないし、この先ソ軍部隊が待ち伏せしているような予感がする。退却を決断、行李長ただあの

とき一大隊だけ連隊本部からの命令であそこまで我々だけが進んで行ったものか、疑い隠せず、八月十三日から朝にかけて曳光弾に銃撃された。

十五日の十時ころ、大隊長負傷されたと報告があった。木村善作伍長が、歩兵の連中、ナラの木で天幕を結びつけてそれに乗せて運んで来る。右手の道路端にも柳の木ぼつりぼつりと生えている。道路と山の間は温地原であるが右手のようではなく平地のような所で、左手は人の入れない水の多い湿地である。大隊長運んで連隊本部に下ろしてその夕方、後方から戦車だあと叫ばれて柳林付近を通過す。警戒態勢他の部隊の輜重が砲弾で散々砲撃されて、あちこち人馬共に倒れている光景まさに生き地獄である。食糧も弾薬も補給困難になる。万一のため手榴弾一個ずつ渡される。獣医部蹄鉄工山本金十郎伍長・盛岡出身から、持参していると安心なんだからと一個渡される。いつ使われるか分からない手榴弾二個の重さ、軽身行軍さえ疲れるのに二つ皆より持ち二倍の安心は親

切。「一身守護」「敵撃滅」命一重、正直計り知れず。

朝、大変、馬がいない。寝る時はいつも手綱を手に縛っているが、疲れて、解けたのも知らず、いつしか放れる。馬だって腹が減るのであろう、草を食っているうちに解けたであらう。草を食う暇さえない、暇で餌を食うわけでない。人より馬の方が重労働でつらからう、飲まず食わずの疲れから、尻たたかれるときの目は物言わずだけのふびんである。二、三人で連隊本部の方から師団司令部と回り始めて十五、六分経てからよく似た馬がいるのに気がつき、傍らに行くと、ヒヒンと私の方を見て歩いて来る。助かった、見つからなかったら大変なことになる、背筋が寒くなる。

午後から曇って夜中は豪雨、食物探しに行く。自動車焼失、残骸荷物は離散している所に出くわす。口に入るものだけ拾ってくる。馬繫索を回して仮寝、豪雨耳に入りて一晚寝れず、うつらうつらの行軍。人馬共に疲労の極に達す。陣地を放

棄、五叉溝の厩舎から残余の軍馬何十頭も各隊野放し、主のない馬が集団作って追いかけて来る。

その中には背を怪我した馬に、ヘエが卵を生みつけ、生きた身にウジがごまんと、うようよ動いている。見る目はばかる。今まで苦楽を共にしていたのに、ただただ苦しみを見詰めて行軍する。手の施しようもない。数団に別れてきたのも、一頭減り二頭遅れして、湿地に入り足を取られて沈むものも何頭か見受けられた。大興安嶺は木のある所は少なく、車両部隊は敵機に狙われやすく行軍はままならず、最小限車両を残し万やむなく車両放棄す。食糧も水も塩もすべて空、歩行すれば足元ふらふら、夢遊病者のごとし。馬の脚下の小便を競って飲む。米本連隊長ノモンハン事件の経験でアマドコロの根を掘り、黄色鶏の足に似た塊茎を煮てほろ苦い味、腹に一物もないからよく食った。満州での野草の食べられる研究の成果が戦場でも生かされる。草根、河魚、トウモロコシをかじり、大興安嶺からの反撃を信じて東進する。西

口の激戦後、戦死者重傷者を残し行李班は馬に草もやれず、ただ夜だけの行動。行進曲の文句でないけれども、どこまで続く泥濘である。行軍中乗馬の上から他部隊者が私に指差して誰何^{すいか}する。返事せず。隣に誰何、佐々木一等兵と答え、再び私は無言。ちょっと来いと言う。木村班長殿、鈴木に用があると言いますが、行ってよいでしょうかと問えば、ばか、自分の持ち場離れるやつがあるかとどなられる。誰何した人は問われたらすぐ返事するものだといストルを向けられる。スパイが横行して不審者は即銃殺、憲兵の特権があったではなからうか。疲労のどん底で返事どころではない。

号什台の戦鬪三大隊患者収容。

八月二十二、三日ころ、輜重か行李か爆撃と砲撃されたの報に接し、三大隊竹内小隊長が来て、負傷患者が出たから応援とのこと。一大隊でないから三大隊長に話して、三大隊の行李班をお願いするのが常識だし、いつ、どこで何が起こるか、

他の隊に行つて自分の方がおろそかになつては大変と思ひながらも行かねばならない。竹内小隊長案内役に行く。夕日は高いから明るいうちに帰れるであろうと考え出発す。部隊が休んでいる夜だけの行動しているときだから、それまでに帰らないうと部隊の居所が分からなくなるのは当然。暗くなるるとまた行動部隊の行先不明、困難を承知しながらどこを目標にする。山や木が同じよう、大海の中を小舟に乗る気持ちである。万一班長事故あつたら近くの部隊の指揮下に入つて原部隊復帰するように言い含められる。二時間は歩いた。八キロメートル小休止もなし、方向も分からない。竹内見習士官もおも先を急ぐ。馬はしきりに草を食う、馬糧も与えていないから仕方がない。暗くなる、道路も山道も未だ見当つかず暗くなると部隊も行進する。進むか戻るか気ばかり焦り、行き先分らず他の部隊からの依頼に余計に焦る。既に十三キロメートル道程に要した時間五時間、竹内小隊長は、山道は既に見失つた、歩いている所

は道ではない。変だ、どの辺かわからない。問えば分からぬでは困る、敵中に入っていたら大変だ、本当にこの辺かと念を押す。うそ返事分かっていればこんな心配はない、沈黙。腹立てずに一時小休止。腰はおろしてはならない。暗くなれば眠気が出ると、相互に声を掛け合う。夜も十二時過ぎ、荒涼とした星だけが悲しく冷たく輝く。任務未だ果たさぬ故にそう見える。日本の空で見る星よりも大きく光も強く数も多く見える。これが満州大陸。この辺に建物があったはずだと周囲を隊長が見渡す。翌日午前一時は過ぎた。砲弾で崩れ落ちた煉瓦造りの一軒家、あれにもしやと期待を寄せて進む。隊長は小声で大丈夫かと問う。誰何すれども患者には大声も出されず、敵であったらの懸念。建物に進入、一番奥の方に重なり合うように見える。また小声で、居るかと問う。外套をかぶって助けを待っていた。言葉もハッキリ聞き取れない、敵かもしれない疑念、相互に恐る恐る近づく。あっ、味方だ。十二人、入って行く。

誰ともなく、助かった助かったと喜び合い、涙声で目が潤む。

車両に二人乗せ、一人は別の車両に乗せて帰ろうとしたら、患者たちは、まだこの付近にいるはず、探してくれと言うので、手分けし、心早に探す。窪地に五、六人負傷者、なぜこんな所に。一緒に居なかったのか。思ったより元気だった。一人だけ足不自由で車に乗せ、二十人以上の小部隊になる。星を頼りに帰る。東の空は明るくなる。号什台の戦鬪前、ハマコーザまでかハマコーザから号什台の間、収容地がある。顔が分かるまで小休止。後方から歩いて来たはずの竹内隊長と当番兵二人は落伍した。誰も知らない。三大隊の患者を運ばせながら、あまりにも無責任。再び一緒にならなかった。部隊が待っている方向、南面を確かめようとしたら、騎兵隊一団我々の方向に進み、いち早く我らの小部隊発見したか、姿が消える。患者窪地退避、三人ずつ道路警戒と開拓地の道路が車両で行けるか、二人で敵状搜索を兼ねて

路上に出る。車両一台分通れる側溝に雨上がり
きれいな水いっぱいたまっている。水筒に詰め
る。敵状発見、患者輸送任務だから戦闘は避けね
ばならぬ、後退準備。突然パンパン銃声、ピュ
ピュ敵の至近弾、耳をかすめてコウリヤンにプ
ス当たると。無防備。五、六発飛んで来たが中

止、霧は患者のいる方から晴れてきた。分隊長
殿、敵から何か合図している様子、赤と白の旗の
ようなものがチラツキます。もしかしたら日の
丸、直感して国旗を銃に縛って敵が見える路上に
出す。千メートル、四百メートルと接近、コウ
リヤンから動く丘の上から、あつ友軍、日の丸
だ。互いにオーイと呼びながら十二、三騎の兵が
目前の横道から出て佐藤竹隊と想っていたが日本
馬でなく満馬の葦毛馬であった。部隊のいる方向
を尋ねた。真つすぐにこの道路を行けば部落があ
るから、そこにいるとのことだった。戦記の中
に、三大隊行李班三個分隊全滅した、未だ不明、
記録されているのも同じ地点であると聞いて背筋

が寒くなる思いでいっぱいだった。また、二大隊
の一個分隊行方不明も同地点。他の部隊から頼ま
れて九死に一生、無事で九十六時間ぶりに復帰
す。大興安嶺で、東西南北不明、暗黒山中に鳥の
絵の十二キロメートル搜索收容、敵中行動不可
解。戦争は空想ではない。

号什台の激戦患者收容した帰路、銃声が前方に
聞こえる。ますます激しさを増す。前線高い丘
陵の中腹を他の部隊の輜重か行李か、晚分隊二個
分隊登って行く。距離三キロメートルくらい、黒
アリのように登って行くのがよく見える。突然敵
機襲来、ドカンドカン爆撃、二、三車兩人馬もろ
とも吹き飛ばされ、兵隊はクモの子散るように右
往左往。山に登って行く者、黒点で動かぬのは即
死、遅れながら地をほうようにして登るのが見え
る。悲壮なる最期、最前線の輜重隊行李班、振り
かかる火の粉はいつしか我々にも遠く眺める、互
いに無言で見直す。

八月十五日以後でも敵機襲来があった。師団は

終戦も知らず各地転戦す。飛行機飛来して師団長中村中将閣下、真実を知り、異口同音、号泣す。

よもや閩東軍、昭和二十年八月二十九日、ジャライ特旗イントルにおいてすべての武器を捨て壊滅す。無抵抗無法無秩序、哀れソ軍警備兵の銃剣に突きつけられ生きた心地せず。作業大隊編成のため、チチハルへの途中、満人が隊列の中に割り込み目ぼしいもの略奪され放題。

九月、半島大隊本部要員として二大隊兵舎に十五行く。閩根惇史少尉・高崎出身、当番十一月三日まで、作業大隊編成のため貨車に乗る。行き先不明。途中停車中の汽車に衝突、本部の貨車破壊、一人死亡。ドカン、爆撃されたような音。暗黒、脱線、満人機関手アイゴウアイゴウ悲痛の叫び、ソ軍兵即射殺す。

日本ダモイと言って十一月四日出発。十一月九日チタ地区チエルノフスカヤ十二分所、齊々^{チチハル}哈爾^{ハル}第十四作業大隊加藤千代之助少佐千四百人、北海道・本州・九州混成患者作業隊下車。殺風景、日

本なら食糧倉庫の建物数軒並んでいる駅から一時間くらい歩いた板囲いの二十棟、十メートルの見張台、未完成の三条鉄線、入所してから交替交替で自縄自縛で張りめぐらす。日本ダモイがこれから始まる生き地獄。なぜこんな作業。込み入った日常生活。西口の激戦、号什台の大激戦、多くの戦友が日本勝利を信じ、国安かれとは裏腹に、敗戦、停戦、抑留生活、希望もない。嫌反すれば即銃殺、武士の問答無用切捨御免再来、何の因果であらうか。これから始まるありがた大迷惑、乗り切らねばならぬ。

三食いつも豆、旧軍の携帯牛肉缶詰空き缶が食器、茶飲み茶わんの大きさ一食が入る量、二十二粒数えながら腹満たす。二週間も続く。食べ終わると空き缶とニラメッコ。患者続出。戦闘中の疲労、寒さと飢え、栄養失調、黄だん、いやすこと止まらず、病死者続出。凍土のため葬られずに入口に無造作に山積みす。この世の情況にあらず。私の班にも三人の患者出て看病人がなくて病室に

勤務す。感染恐れて行く人もなし。予防薬なし、シラミの媒介、ダニ発生にて発疹チフス横行。金沢正治・久慈出身、早大文学部卒、娘二歳のとき出征。別れしときのかわいかった目耳口、あとは何褒めたらいいんだと私に聞く。会いたい見たいの親心、娘の名呼んで自慢話、尽きぬ話に花咲かす。再会成長もつかの間、昭和二十年十二月二十三日早朝、娘の名を呼んで再び目開かず。

昭和二十一年三月四日、ブンゲル作業、同郷土出身一ノ渡市太郎に知り合う。師団司令部高等官待遇設計技師、中村某東京都出身、一緒に身体検査。女医下半身下げしりをつねっての健康診断。右義眼を見てアメリカで手術したかと問われる。オカ患者として軽作業。

昭和二十一年五月一日から昭和二十二年一月七日までの間、給与係、三、七、十二、十三、十七の棟、飯上げ。秋田県出身、酒藏御曹子島津中尉は、どこに行っても飯上げだなと言われる。離合集散で棟換えで一緒になったことがあったらうか

と思った。配膳分配のときは七十人の異様の目を受けながら分配する。多い少ないの三食時の興奮、争い、常に絶えず。たるに、飯ごうに水を入れ基準の物差し作り、苦情申し出た多い少ないの入れ物を皆の前で差しを入れると多少の変化なしで納得してもらい、自分たちの目の欲なること、目前公平配膳で、いつしかこの棟に移っても給与係依頼されるし、職にも協力してもらい責任を果たしました。

ヤボン松岡イエス、子供から大人まで松岡洋右知らぬ人はない。スターリン自身駅まで見送りの話。ヤボン松岡英雄扱いだったろう。このことが日本の油断ではなかったらうか。「条約は破るもの」と不可侵条約一方的に破棄。日本、正直者、煮え湯飲まされる。

一月一日、四月二十九日、祭日、祝日は朝から夕方まで外に出される。ヤボン切腹と信念の強さの恐れからとのこと、不穩の動き、持ち物検査まで実施する。

漫画本にシベリアで小便するときには金づち持参する、小便をする下から凍って山になってくる。ああ、このことを言うのか。うそのような本当の話。寒い話で息も凍りそうになる。

昭和二十二年一月八日、チタ三八一收容所、仕事での要請が結束を恐れての転属か、コルホーズ。長い畝三本、芋まきで一日ノルマ終わり、早く終わったので手伝わら、やめると言われる。向こうがノルマ上がるからとのこと。働かざる者は食うべからず、仕事そのものよりノルマが大切。

製材所に手伝いに行く。廃材捨て終わりトロツコに乗って帰ろうとしたとき、乗り切らぬうちにスイッチを入れられ転倒、失神。気がついたときは首は車輪の下、小指一指だけつぶれて軽傷、すぐスイッチ切ったから助かる。そのままいれば絞首刑で首コロリ。

命からがら昭和二十二年四月、日本ダモイ。チタ地区三八一收容所出発ナホトカ着。大きな集会

所三平方に相互に十人での寝食。足で頭けられ、騒動すればダモイ取消し。ガマンガマン。トイレは順番、三十分待ちで漏らし者続出。港、天候不順で乗船できず。洋服屋いなくて、帰国目前を控えて技術あるが故にそのまま帰らず、技術あるも良し悪し。天候悪化で船が近寄れず、海辺の湿地に一夜明かす。

五月二十四日、昨日の荒れがうそのよう。大きな勇姿、永禄丸、目前に大きな体の米内閣下の姿が浮かぶ。天候も今日は我らを祝福するごとく穏やかに、船酔いやらなければよいがと二、三日航海を神に念じ、我々の多年の辛苦をねぎらうように誰一人として酔う人もなく、生きて日本に帰る。

ただただ残念に、いまだにソ連と平和条約結ばれず祖先が待つ冥府にも入れず、美辞麗句にあげめし英霊、紺碧の故里目の先祖迎えてる。生まれとんで木の葉散る、はつる悲しみ裏おもて。赫々の武勲、関東軍よもや籍を置いて忒百壱日飢

餓と酷寒の死闘、風前の灯六百五日経て五月二十

六日舞鶴入港。寮には御苦勞様の勞の書あり。日

本上陸、新緑のにおいいっぱい吸いながら六月二

日遠野駅着。入隊からイントル武器納まで終始お

世話になった木村善作氏復員後亡くなられ、今語

り合えぬわびしさ。冥福祈る。合掌。

生活の晝業、子二人と孫二人に恵まれ平凡の生

活。市から依頼され昭和三十四年統計調査員とし

て各種統計に従事しているこのごろです。

燃機株式会社

軍 歴

昭和二十年二月十日 弘前東部八

十部隊

〃 二十年二月二十三日 満州一

〃 七師団二〇一部隊一大隊本

部猪俣隊

〃 二十年九月 武装解除

シベリア抑留

〃 二十年十一月 チチハル十四

作業大隊チタ地区チェルノフ

スカヤ十二分所

〃 二十二年一月 チタ地区三八

一收容所

〃 二十二年五月二十六日 永祿

丸にて舞鶴帰国

帰国後の職歴

〃 二十二年六月 鈴木屋山重畳

店経営 現在に至る

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年七月二十六日

現住所 岩手県遠野市穀町

学 歴 県立遠野高等学校二十七年卒業

入隊前職歴 昭和十五年県立遠野中学校喇叭手

心得

〃 十七年岩手興産無盡株式会社

書記補

〃 十九年神奈川県寒川町日本内

表 彰

国勢調査員総理府統計局長感謝状

統計調査員岩手県知事感謝状

住宅土地統計指導員総務長官感謝